

奥田 央著, 『ヴォルガの革命』,
(東京大学出版会、一九九六年一月、七〇〇頁、円)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000025

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



奥田 央著

『ヴォルガの革命』

梶川 伸一

本書は膨大な内容を含む叙事詩的な研究書であるが、わずかな紙幅でそれを伝えるのはまったく不可能であり、ここで言及するのはその一部でしかないことを読者諸氏にお断りしなければならぬ。

著者ははしがきで、浜内譲教授の「仕事を受け継い」での研究であるとの立場を、まず明確にしている。だが、著者の仕事は必ずしも、浜内教授の業績の延長ではない。教授の作品と比べて、おおよそ次のような本書の特徴を挙げることができる。

第一に、地方公文書資料館（アルヒーフ）を含めた広範な未公開資料に基づき、ヴォルガ中流の地域史研究である。著者はこの地域を代表的なロシア農村と想定し、この地域とモスクワ中央との関係を跡づけることで、この「ソ連史の劇的な転換点」を描こうとしている。第二に、歴史過程の明瞭な農村の「絵」を提示しようとしていることである。それも平易するほどの資料を用いて、結論から言えば、この著者の試みは七〇〇頁以上にも及ぶこの大著の中で見事結びあつて、ロシア農村の、と言うより世界的にもほとんど例を見ない一大悲劇を、歴史叙述することに成功している（前書で氏は、農民生活の内的的論理

を全面に押し出してコルホーズの成立過程を描いたが、そこでは当時の政治状況との関係が希薄であったために、ソ連史全体のダイナミズムを描くことに必ずしも成功したとは評者は考えていない。この成功を支えているのが、氏のアルヒーフへの接近方法である。アルヒーフ資料でさえ、時には選択され改竄されたが、これらの資料にもっとも精通した研究者の一人として氏は、「アルヒーフ資料の利用においては、つねに慎重でなければならぬ」（四三頁）との態度を失っていない。全体的構図の中で資料そのものを点検しつつ、地方資料を最大限に活用して、これだけ精緻でリアルに叙述されたソ連史を、ロシア・西欧で刊行された研究書を含めてもほかには知らない。

本書は、二七年末からはじまる穀物危機への対応として、非常措置が適用された後の二九年に農村で行われた穀物調達の実体的研究からはじまる。本書が考察の対象とするこの数年間がソ連史にとって決定的時期であるのは、集団化、共同体の解体、クラークの清算が相互に関連しながら進行し、スターリン体制（狭義のそれだけでなく）を確立させ、それに未曾有の飢饉が加わったことにある。この時期を境に、ソ連「社会」の相貌は完全に変容した。本書未見の読者のために、章立てだけは紹介しなければならない。第一章 一九二九年の穀物調達、第二章 全面的集団化の開始とクラークの階級としての絶滅、第三章 「ポリシエヴィキの春」、第四章 一九三〇年の収穫と調達、第五章 集団化の再開 一九三一年、第六章 ヴォルガの早魃、第七章 集団化の後退、第八章 収穫から大量弾圧

へ、第九章 飢饉のさなかで 一九三三―三四年、第一〇章 結論への点描。

氏は二九／三〇穀物調達年度の過程で既に「クラークの清算」が行使され、それは暴力的やり方による全農民の穀物供出義務の適用と同時に進行し、このような方法が、その後の集団化の嚆矢となったことを指摘する。「われわれが、一九三一年の集団化と昨年のそれとの共通性を強調する」（三三〇頁）。それは、現実の行き過ぎを非難しながらも既定の方針の深化を指示したスターリン論文「成功による眩惑」の評価でも繰り返される（四四九頁）。「クラーク清算」の論理とその現実を知るには第二章第四節を読むだけでよい。この政策が、ロシア農村の解体と、同時に劣悪なコルホーズを創設することになったのは、その後の必然的帰結である。コルホーズに農民はどのように反応したか。「村のなかにコルホーズの土地が境界をもって出現するとき、共同体農民はコルホーズの出現を実感する」（二二〇頁）。土地関係、農法、家畜などの農民の日常的問題を絡めてのコルホーズの分析は、氏の独壇場である。農民の不満は高まり、ポリシエヴィキ政権打倒のための戦争への期待感にまで高まったと、氏は資料に基づき断言する（二〇八頁）。まさに恐るべき事実の発掘である（ゲ・ベ・ウ資料であろうか、それらの生々しいこと）。本書の特色は、それを飢饉の出現と厳密に関連づけたことにある。この原因は公式に流布されているように、早魃ではなく穀物調達による人為的なものであることを、当時の責任者に語らしめている（三〇〇、四一七

頁)。「コルホーズの飢餓を決定した主要な要因が国家への過大な供出義務であった」(五八六頁)と、氏は結論づける。飢餓から飢饉への描写は庄巻で、飢餓ではじまった十月革命が、飢饉をもつて一つの時代を終焉させたことを実感する。

この終焉は、農村権力の有り様にも反映され、以前は穀物調達の実施は擬制的にせよ(全権代表の圧力の下で)村ソヴェトが実行していたが、三〇年の段階で「農村のソヴェト権力そのものがロシア農民のきわめて大きな部分のなかで信頼を失った」とする(二三九頁)。ただし、この主張は説得的でない。依然この時期に村ソヴェトとは共同体農民の体現機関でしかなく、「信頼を失った」ソヴェトとは中央政策の不履行の廉で逮捕され、一掃された「新しい村ソヴェト」であったはずで、そのことは本書で言及されている(三二五、三三六頁)。このようにし、最終的に村にいたる「全体の命令的な統治システムが強化されていった」(四一一頁)。このような数年の過程の考察で、著者は基本的にはその連続性を主張しているように思える(たとえば、新たな穀物調達制度である「義務的納付制と従来穀物調達システムとの根本的な相違を強調することはできない」との指摘(五七七頁))。三一年は、十月革命からはじまる「都市の勢力による農村への攻勢」が事実上終了した年であった。これはコルホーズに加入できず、農村での経営の展望を失った個人農が、農村から都市へと最大規模で移動した年であることも意味した(三四八頁の記述は農村と都市が、明らかに逆になっている)。これはソ連農業全体の崩壊のはじまりであっ

た。

村計画にいたる穀物調達は、まさに戦時共産主義期の割当徴発方式の再現であり、当時の為政者も農民もそれを意識していた。しかしながら、それらの差異も大きかった。中農路線が確立された一九年春の党大会で、強制力による集団化は否定され、二〇年末にレーニンは、現在農業の社会主義化はユートピアであると語ったように、この時の集団化はほとんど実体がなかった。その一〇年後に集団化政策が、その遂行だけが唯一の目標であるかのように断行された。この急激な転換は、重工業化による農業生産拡大の要請といった従来の解釈だけでは説明できないように思える。過度の「クラーク清算」やコルホーズからの農民の追放(それが「怠け者」であったとしても)は、農業生産全体の解体に帰着するはずである。そこで機能したのは、いかなる「時代の論理」であったのか。割当徴発は播種面積の大幅な縮小をもたらし、これに危機感を募らせたポリシユヴィキ権力は播種キャンペーンを展開し、それは事実上割当徴発を停止させた。それでも二一年の飢饉は起こった。スターリン指導部はこの事実を知悉していたはずだが、三一年に「調達の遂行によって食糧ばかりか翌年の播種用の種子までとりあげられた」(四〇六頁)のは、いかなる「論理」が伏在していたのか。穀物調達危機を克服するため、非常措置が常態化され、それ以後の過程は本書で充分説明されているように、相互に関連して進行した。この過程は理解できるとしても、それをつき動かした「時代のエネルギー」は何であったのか。より大きな

粹での問題設定で、いくつかの疑問は未解決に残された。著者は勿論このことに無自覚ではなく、最終章でこのことは考察されているが、「全体的に解決することはできない」ままに終わっていると思われる。著者が念頭においている「総括的な大問題」の一定の解答をわれわれに提示することを、読者は待望しているはずである。

円) (東京大学出版会、一九九六年一月、七〇〇頁、